

当財団のこれまでとこれから 次の10年を考えるために

新型コロナウイルスの感染が拡大するなか、不安や不自由をかかえ、心落ち着かない日々をおすごしのことと思います。

さて、一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団は、2010年に吹田市万博公園内の大阪府立国際児童文学館が廃止されたあと、大阪府立中央図書館内に事務所を移転し、再スタートしてから10年になりました。新たにオープンした大阪府立中央図書館国際児童文学館と連携、協力しながら、子どもの本・子どもの文化の振興をめざして、いろいろな活動を展開してきました。あたかも荒海に漕ぎ出す小船のような私どもの財団でしたが、10年間、何とか航海をつづけてこられましたのは、応援してくださる皆様や関連諸団体の皆様のおかげです。深く感謝申し上げます。

子どもの本の普及活動、教材開発を通じた子どもの読書活動の推進、子どもの本を通じた国際交流事業、研究・出版活動など、この10年間、財団は、成果を積み上げてきました。一般財団法人 金蘭会と共催の「国際グリム賞」も今年度は18回めの選考にかかりますし、日産自動車株式会社協賛の「日産 童話と絵本のグランプリ」は37回めをむかえます。研究紀要は、第33号を刊行します。

しかし、財団の経営については、困難な状況がつづいています。2017年度、2018年度は700万円台の赤字決算でした。2019年度は、もう少し回復していますが、経営のありかたが根本的に改善されたわけではありません。**この状態がつづけば、10年後には財団はもう存続できない——私どもスタッフは、危機感を強めております。(これは、もう一つの緊急事態宣言です。)**

財団の経営危機を抜け出し、子どもの本・子どもの文化の振興にかかわる活動をより豊かにしていくにはどうしたらよいか。その道も、財団の10年間の総括を通して見えてくると考えます。

子どもの本・子どもの文化の未来を拓くことは、この国の未来を創造することにほかなりません。

むこう6か月の予定で、毎月1日にメールマガジンの特別号を配信します。特別号では、財団の10年間の活動をさまざまな面から振り返り、その成果と問題点を書き出していきます。**そのなかで、ぜひとも財団の存続可能性を見出したい、財団の新しい10年を創造したい——それが私どもの思いです。読者の皆様もいっしょに考えていただければ、まことにありがたく、お願い申し上げます。**

2020年5月1日

一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 理事長 宮川 健郎